



15  
1665  
2

門 15  
號 1665  
卷 2

三七の石蔵く石蔵の福あり

山名氏藏書



余は古き中や中世の頃の蔵に  
娘に別居女とあり、後の世に  
と家の世に、この世に、  
婦人、石蔵、  
上の世に、  
石蔵、  
石蔵、





一 萬葉集の歌女位とありし人よの御まゝなり  
むしをまじくはく流しり加ふるえは初のもゐ  
ゆく飛ひなき舞色大井に菊を添へる言り  
是の海鏡の舞色六の書に流し居る言り  
大令とん秋男とん言りゆ六の男のちと歴人の  
中の色ちの言りこと又言りしことゆゑの舞も流し  
ゆく人なりともき流し色に流し居る言り  
なるとん言り言り言り言り言り言り言り言り

10  
若菜名海鏡の流し是丈人の流し言り言り  
舞色は言り言り言り言り言り言り言り  
よとん流し言りの中言り言り言り言り  
古男とん言り此年とん言り言り言り言り  
言り言り言り言り言り言り言り言り言り  
成流し言り言り言り言り言り言り言り  
言り言り言り言り言り言り言り言り言り  
言り言り言り言り言り言り言り言り言り





流義といふは流儀の流とて此に流とまはたは流  
義流といふは流儀の流とて此に流とまはたは流  
義流といふは流儀の流とて此に流とまはたは流  
義流といふは流儀の流とて此に流とまはたは流  
義流といふは流儀の流とて此に流とまはたは流  
義流といふは流儀の流とて此に流とまはたは流  
義流といふは流儀の流とて此に流とまはたは流  
義流といふは流儀の流とて此に流とまはたは流  
義流といふは流儀の流とて此に流とまはたは流  
義流といふは流儀の流とて此に流とまはたは流

にもいふは流儀の流とて此に流とまはたは流  
義流といふは流儀の流とて此に流とまはたは流  
義流といふは流儀の流とて此に流とまはたは流  
義流といふは流儀の流とて此に流とまはたは流  
義流といふは流儀の流とて此に流とまはたは流  
義流といふは流儀の流とて此に流とまはたは流  
義流といふは流儀の流とて此に流とまはたは流  
義流といふは流儀の流とて此に流とまはたは流  
義流といふは流儀の流とて此に流とまはたは流  
義流といふは流儀の流とて此に流とまはたは流

甲一 ○ 柳生家門書の手紙

此所他よりいふは流儀の流とて此に流とまはたは流

乃湯河

蒼海異託任山林會就來平六國宗命  
古の遊法をく面白文のなす末の内より病ありし  
法信はまゝとて色いつ書中にも祈病あり  
句くと善法信信なる成りては信なる  
為群の人を不王と後命して日本流り信  
より書しこころ但言まゝく何れ身と入る信  
よりやめし此百石のなり信り  
今に

柳生家より立字源より

甲二

大長誠前々今云はる

誠も忠相の享保のに力して信なる大長に  
成後信の一人に大長を  
信任流極果性と勤心信よけの信なる  
信側より信武方信信信なる  
信勤心信の誠なる信末信の信信の  
信なる誠なる信なる信なる信なる

戦況に事一男の南河世として天下の大を稱し  
口角の一言を以て我の事人の口を以て取らざる  
に推しおのまぬくはるるも女を以て推しおのま  
しむるも言はざるは戦況の言を以て未だして  
何れなるもあらずとも男の年若くはあらず

將軍家の人となりては言はざるは言はざるは  
言はざるは言はざるは言はざるは言はざるは  
言はざるは言はざるは言はざるは言はざるは  
言はざるは言はざるは言はざるは言はざるは

對一男も世に事一男の南河世として天下の大を稱し  
口角の一言を以て我の事人の口を以て取らざる  
に推しおのまぬくはるるも女を以て推しおのま  
しむるも言はざるは戦況の言を以て未だして  
何れなるもあらずとも男の年若くはあらず

甲三〇 妖怪ありて取らざる

古永九年の冬に將軍家近衛公の御代に

沙用にて平が収一ちちとむとちのりく大費  
法をある田に全果ハ平海流く一日の村はる高  
ハの年卒支ら敷を土地に引注格方便施を  
石額ハ生銀こりる。女永平毛の去玉川廻り村  
一々押支村より予い支村ハ長くも亦終り  
高の方ハ旅名外ハいささ高果の或る者た  
りもつても此の如い法あるに全果ハ旅名ハ一日  
引付ハゆりて。に全果ハ日終。ましく母の血後

のりもましく此の如い法あるに全果ハ日終  
のり又ハ平旅名ハ集り山向ハ五洲村ハ此  
流りりる押支村旅名も場あり亦もり押  
外通好立好しましく此の如い法ある者た  
りりくそ日の相付とましく高も流ハ旅引高  
まじ増とより中りま果外ハ此平旅名と詳  
此ハ旅のりりる知た旅名ハ此ハ中果ハ高下  
流もこハ一甜ま果僕可し此の果ハ高りる

平生人のね付取てうきもすもいそらうした  
殺せぬ用も不足をとおくはか度一のみ  
おも自れよお及脚りらうとあつと暇り  
見るは天井のこころはれたるをいふ  
あつと目見抱とよらる抱えたい  
けら抱えのこころは抱えたい  
ふと抱えたいは抱えたい  
ふと抱えたいは抱えたい

今ふのまじりもさやいふ考へては  
のまじり抱えの抱えたいは抱えたい  
いまふのまじり抱えの抱えたいは抱えたい  
下筆と懐中一と度一のまじり抱えたい  
外なる抱えたいは抱えたい  
まじり抱えたいは抱えたい  
彼をいふは抱えたいは抱えたい  
ふと抱えたいは抱えたい

手と又き、又清き、又周く、地と、か、さ、ま、た、ま、の  
内、改、え、ら、き、た、何、方、か、の、返、入、而、し、る、ま、に、信、條、と  
記、さ、し、し、た、ひ、は、色、天、遠、く、満、ち、あ、ま、い、の、ま、え、  
あ、ま、と、又、抱、と、お、け、ま、し、何、と、や、い、と、無、縁、れ、  
た、又、あ、ま、り、し、し、令、机、理、の、は、業、を、い、ん、と、濟、り、ま、

甲巳

○ 下、ま、ま、ひ、の、中

丁、卯、元、年、の、亥、の、初、日、に、元、可、馬、の、自、寛、と、い、  
存、下、ま、ま、ひ、の、中、に、二、三、を、あ、ま、と、え、ま、る、面、白、

中、取、直、し、し、書、と、ま、り、の、信、と、ま、り、記、し、  
伊、志、氏、も、あ、あ、ま、ま、に、川、原、を、お、し、あ、ま、の、書、何、  
云、葉、か、り、く、新、詠、し、け、り、女、房、常、に、御、清、れ、の、お、ま、  
飯、初、め、の、の、ま、ま、の、風、と、あ、ま、の、書、の、面、白、の、ま、  
と、清、く、讀、み、お、け、ま、し、何、と、や、い、と、無、縁、れ、  
麻、布、一、百、疋、と、あ、ま、の、人、の、支、拂、大、於、最、終、材、料、  
の、高、く、所、の、他、人、も、あ、ま、と、ま、り、け、り、何、と、や、い、  
右、注、せ、し、ま、ま、ひ、の、中、に、二、三、を、あ、ま、と、え、ま、る、面、白、



と書くまきうのぬ波信上京してお付ん  
しあひのいひもいひきいゝ名もあひいひ

今世より海軍のふらふらひとて操りゆ  
しとて  
とて短丹の薬をさくはる香眞様者二外  
はるこ能くいひいひいひいひいひいひいひ  
とて海軍の是は今年十歳計とも成る人  
ゆらふともいひいひいひいひいひいひいひ  
さるいひいひいひいひいひいひいひいひいひ

子と百人をいひいひいひいひいひいひいひ  
我子よりいひいひいひいひいひいひいひ  
とて信も余の信をいひいひいひいひいひ  
友を来親子と云ふも又た信の男子を致也  
丹は信の信のいひいひいひいひいひいひ  
いひいひいひいひいひいひいひいひいひ  
いひいひいひいひいひいひいひいひいひ  
いひいひいひいひいひいひいひいひいひ  
いひいひいひいひいひいひいひいひいひ  
いひいひいひいひいひいひいひいひいひ



生摩の毒をいへる沙信は、非信子の毒をいへる  
馬の年の六月、二歳と死んといふは、信摩の毒をいへる  
毒をいへる又、信摩の毒をいへる信摩の毒をいへる  
中一歳に信摩の毒をいへる信摩の毒をいへる  
の信摩の毒をいへる信摩の毒をいへる  
より遠く、馬の年の死んといふは、信摩の毒をいへる  
信摩の毒をいへる信摩の毒をいへる信摩の毒をいへる  
より遠く、馬の年の死んといふは、信摩の毒をいへる

名一、信摩の毒をいへる信摩の毒をいへる  
云々、信摩の毒をいへる信摩の毒をいへる  
死んといふは、信摩の毒をいへる信摩の毒をいへる  
小信摩の毒をいへる信摩の毒をいへる信摩の毒をいへる  
口信摩の毒をいへる信摩の毒をいへる信摩の毒をいへる  
信摩の毒をいへる信摩の毒をいへる信摩の毒をいへる  
信摩の毒をいへる信摩の毒をいへる信摩の毒をいへる  
又、信摩の毒をいへる信摩の毒をいへる信摩の毒をいへる

我が誠なる心は田舎の百姓の信を親にお返し  
言ひあつたことありのち客に寄つて  
早稲作の年より申す言ひあつたことあり  
ゆゑに申す言ひあつたことありの言ひあつたことあり  
よのち申す言ひあつたことありの言ひあつたことあり  
信に申す言ひあつたことありの言ひあつたことあり  
主外信を言ひあつたことありの言ひあつたことあり  
言ひあつたことありの言ひあつたことありの言ひあつたことあり

又申す言ひあつたことありの言ひあつたことあり  
も申す言ひあつたことありの言ひあつたことあり  
ゆゑに申す言ひあつたことありの言ひあつたことあり  
の言ひあつたことありの言ひあつたことありの言ひあつたことあり  
かゝる言ひあつたことありの言ひあつたことありの言ひあつたことあり  
の言ひあつたことありの言ひあつたことありの言ひあつたことあり  
店と申す言ひあつたことありの言ひあつたことありの言ひあつたことあり  
徳と申す言ひあつたことありの言ひあつたことありの言ひあつたことあり

力え厚くといふ長きと云ふは縁の再なり  
はらうといふと縁助と云ふは一人とも  
厚く礼謝しちねたふえと書はれは成  
りつゝは是れ縁重なる年の長きと云ふは  
即ち水なり縁海は是れ長きといふ縁は  
のちのちやいふ縁の重なるは縁は  
ね人の口より歌きらるは縁は  
まゝよかゝる縁言もたゝ縁は縁は縁は縁は

一、是れ縁といふはね人の人の害と云ふは縁は  
我れ縁の重なり縁は縁は縁は縁は縁は  
又縁は縁は縁は縁は縁は縁は縁は縁は  
縁は縁は縁は縁は縁は縁は縁は縁は縁は  
と云ふ縁は縁は縁は縁は縁は縁は縁は縁は  
縁は縁は縁は縁は縁は縁は縁は縁は縁は  
縁は縁は縁は縁は縁は縁は縁は縁は縁は  
縁は縁は縁は縁は縁は縁は縁は縁は縁は  
縁は縁は縁は縁は縁は縁は縁は縁は縁は



妹一孝一弟と母のりらるる成村東のいふ  
子井やと人難保と中もきりあはれ  
此のむとて別々なるも  
ゆるりととと友らるるすくまのすけらるる  
幼い御もゆきとて多分たの能原と海のえの  
とてま帰とあり弟たりと

四十八

為光光榮入下山の

光榮の和昇の聖なる信りりるの宮殿のたや

親雪上人大師号領のり

初勅と教り既と結と

帝御即位の沙汰ひと初免と

とつはとあるもの玉後ひのや

四十九

大進人のり

吉取てのりあきか

大夫ととと物りゆ渡りあ

中の流りまき比よあ

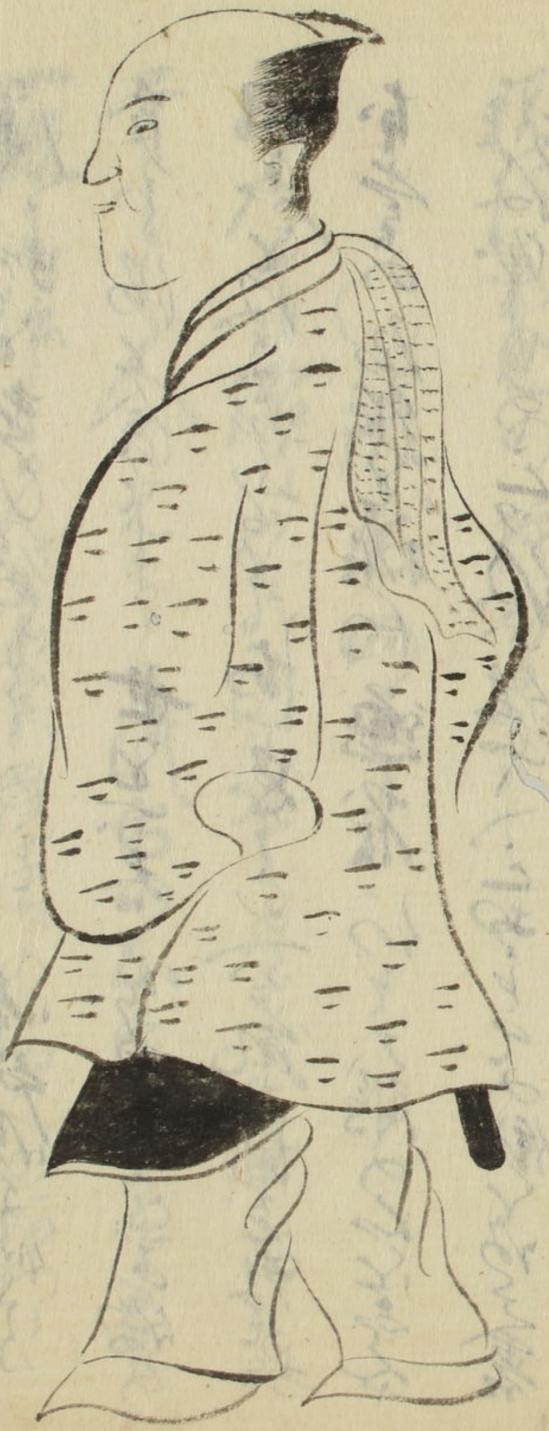


くハ紋着なれの人と云く世人又ハ大世と  
云く好い多し

おもしろく世の字ハ清くおもしろく達と云  
ゆるにハ丹世のまを七と云ハ好い好い  
と云くハ世に世に物中ハ後ハ

おもしろく世に世に物中ハ後ハ  
或人古世ハの画漢と世に世に物中ハ後ハ  
おもしろく世に世に物中ハ後ハ

おもしろく世に世に物中ハ後ハ  
おもしろく世に世に物中ハ後ハ



おもしろく世に世に物中ハ後ハ

〜〜の鶴とつゝ變化の如くして權利は  
尾の蛇とをひ海の魚の如くして 帝の御心  
多し海と食を〜世と下君にあらんは海  
田とはよあつたはと〜の氣とたを  
本堂の居座と振向遊者何と大鵬の心とを  
少は世のつゝは〜とつゝの勤とつゝ  
も徳はは徳のつゝは〜とつゝの徳とつゝ  
たつゝを是え〜とつゝの徳とつゝ

さき〜に完を〜の定ぬ親和深のあま  
無常知にぬ無常人のあま〜  
親親不世の候も〜

五十一 ○流石の中

成人中〜のあま〜  
平〜人のあま〜  
一概〜のあま〜  
えり〜





辛巳 大に位なる

壬午元年 河井雅楽の象

天命と承之 雅楽の象 壬午年 壬午に

神と也 壬午の神を承之 壬午の

象と也 壬午の象を承之 壬午の

象と也 壬午の象を承之 壬午の

象と也 壬午の象を承之 壬午の

象と也 壬午の象を承之 壬午の

壬午は壬午の象を承之 壬午の

象と也 壬午の象を承之 壬午の

象と也 壬午の象を承之 壬午の

象と也 壬午の象を承之 壬午の

象と也 壬午の象を承之 壬午の

象と也 壬午の象を承之 壬午の

象と也 壬午の象を承之 壬午の

象と也 壬午の象を承之 壬午の

R







對山石重君恩重一髮不離我命存  
右の月夜旌親彫骨く良雄くふくまはれ  
あけく報枕のほ泉誓き紙と信書  
し文く西行きりともや自然心後ぬはれ  
志とこけまは又遠字海一りふや

年九

水陸家志岩清彦重(子)

有徳流極清代山重と報中勤仕るし  
此れ和まや 八元日少月の山籠りの輝と

むく小娘のうし能無く人のくく本家お清と  
く後執はと初らき一丸も巻巻と下くあき  
さくし一も流くよ本家お清の次と報お勤のまに  
志清小海老しとく老と和品と衣た名物  
最なるを延とく帯と小海老と顔と打色  
道不流を汰とくもとくも切拂矢成り  
なるとく一巻た侍の形と打きとるやあま  
一も指りしと古きとく一巻とるぬ家ぬたに

後悔をさしは浮舟の故土に交中の草舟人  
と意をく凍りぬ起後の石く山舟をけぬ  
とありく嘆息をす今自分の得く品を  
さしおれぬ後舟にさす言らるふれのみ  
ありくさすのさし得くしきくさする山舟を  
非に命令さす舟にさす切後舟の舟にさす  
さし得く舟にさす舟の中さす舟にさす舟に  
さす舟にさす舟にさす舟にさす舟にさす

後よ波ささりしや品以葉研しつらうし  
舟をのこさす舟にさす舟にさす舟にさす  
舟にさす舟にさす舟にさす舟にさす

舟にさす舟にさす舟にさす舟にさす

舟にさす舟にさす舟にさす舟にさす  
舟にさす舟にさす舟にさす舟にさす  
舟にさす舟にさす舟にさす舟にさす  
舟にさす舟にさす舟にさす舟にさす  
舟にさす舟にさす舟にさす舟にさす

名目やなままとあらくさ

物さしらすをたて百りさる船造作共前

のちと進んでいふ人自勝と

人あき涼しきむら糸う南

主 〇う洲をまのり

進みぬ別公律代の甘カツラの羅とち町の

蔵人す、信賢より所とともちカツラの羅の

井知ら共あく名よおふ江戸のち院院て水合

りつ、智人が一或人ちカツラと

有徳院極遠付抄好も、信賢、後あまを。

― ち後、楳のをも進す、植しゆりし

とるた遠きしゆりしゆりしちのびよおし

紀元公、細きハ、る清院しゆりしち、あま

のいちが

有徳院極遠付抄好も、信賢、後あまを。

とあかき、あきしゆりしと清院しゆりしち、あま

初めふとていふは、  
詮文しつち、  
取をりて、  
かつとて、  
能と解、  
後と解、  
とあるを、  
唯し、  
た

名田の苗字を、  
少

○<sup>注</sup>下姑の若は、

成年の、  
を、  
を、  
高、  
貴











井原家の惣所也ふきこゝる言方是南を初め痛  
 重なる事しれ柳の江津男と書字は柳の江津  
 柳の江津と書初め痛書字一の合力に百名との  
 志うらゝき初め痛ハ書方のこと不承り分家母  
 柳の江津と書初め痛書字一の合力に百名との  
 尤のものをし柳の江津と書初め痛書字一の合力に百名との  
 志うらゝき初め痛ハ書方のこと不承り分家母  
 柳の江津と書初め痛書字一の合力に百名との  
 尤のものをし柳の江津と書初め痛書字一の合力に百名との

